安全登山推進の現状
ー煩悶する日々ー

遭難対策常任委員　青山千彰

2396！
増加し続ける遭難事故

増加は問題なのか？

減遭難対策として、打つ手はないのか

増加は問題か？

（1）増加は問題である

当然、負傷、死亡、行方不明者が増加する訳であるから、重要な社会問題である。

どこも責任を問われないから問題でもある

（2）必ずしも問題とは言えない

放置すれば、深刻な事態に陥ってしまうはずの遭難事故者を、軽度あるいは無事救出するのだから、レスキュー活動の優秀さを示す成果として数が増加してるのは、仕方ない。

増加要因の責任は どこにあるのか？

（1）責任はある

全山遭の主催団体、文科省、警察庁、消防庁、環境省は国民の安全で健全な生活を守るべき立場として、日山協は公益法人として、責を負うべき。

（2）責任はない

登山は自己責任においてなされるべきもの。その行為の結果に対し、一切の責任は負う必要はない。

減遭難対策を考える

より効果的な対策を目指す

注）防災から減災へ、
遭難防止から減遭難へ

従来の対策1

（1）警察庁による事故調査
（2）環境省など関係省庁で登山道などの整備
（3）警察・消防・山岳団体によるレスキュー
（4）事故関係団体からの呼びかけ
（1－4）すべて重要な行為であり、なくてはならないもの。しかし、対処療法であり、増加を止め、減少させるものではない。

従来の対策を考える2

- 遭難事故防止の呼びかけ
  例「登山の事故防止に向けて取り組もう」

⇩

どれほどの効果が期待できるのか

効果あり説
1. Media、山岳団体への浸透
2. なければ、さらに多く
の事故が発生する

効果なし説
1. だれも、毎年同じようなことを呼びかけて
も無関心
2. ポーズ
3. だから増加する

減遭難に結びつける対策1

効果的 ① 道迷い＝環境整備（道、小屋、道標）

要議論 ② 救命率改善＝救助（夜間レスキュー）

要議論 効果的 ③行方不明＝情報（警察犬導入、登山届
事故データベース、事故マップ
専門家の養成）

減遭難に結びつける対策2

効果的

④ 疲労性事故＝計画{分かりやすい目安＝(体力. コース. 装備. 食料)}

情報提供者？

⑤ 意志決定ミス減少＝リスク情報(天候、地形、事故、食料、服装、人)

行動への判断

⑥ 意志決定根拠＝リスク情報(事故発生確率、影響度、事故データベース)

まとめ人必要

⑦ 自己責任意識形成＝教育(倫理の定着、統一知識で指導)

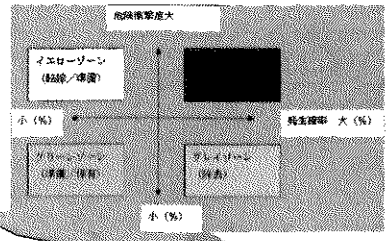
減遭難に結びつける対策3

効果的

⑧ メディアによる啓蒙化＝広域情報(正しい登山情報、窓口設置、定期接触)

各種対策への取り入れ根拠

- 「どのような項目から対策を練っていくべきか」その量的な目安が必要となる。図はフィンクの予想図から得たもので、危険度と影響度から構成される。
- このような数量的な背景の中から、そのプライオリティをつけて対応する



遭対とはどのような活動をする所か？

(1)実際にレスキュー活動する
　　行方不明の捜査
(2)レスキュー技術を伝える
　　講習会、実技セミナー、各種登山教育
(3)遭難防止・軽減活動
　　現状把握、分析、対応策検討、実施
(4)諸官庁、山岳団体との交流、パイプ
(5)メディア窓口
(6) その他

減遭難PDCA

- Plan > Do > Check > Act
- 今後の減遭難活動は、
  明確で分かりやすい計画とその結果予想
  実施
  その効果の判定
  修正
  再実施
  のサイクル繰り返す必要がある。